

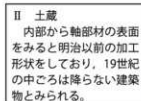
■ 旧宅内の建物

現存する彼の生家は、その建立の時期を明らかにする資料に乏しいが、残る資料から18世紀末の建築と推定される。屋敷は恋瀬川畔の平坦地にあり、たびたびの氾濫に現在の地に移したといわれるが、その時期、事の実否については確証がない。建物は往時の形態をよく残しこの地方の民家として価値が高く、昭和19年3月7日に国の史跡に指定された。



I 主屋

寄棟造、茅葺の直屋で、18世紀末頃の建築と見られている。佐久良東雄が下林村の観音寺へ弟子入りするまで、約8年間を過ごした建築物である。



II 土蔵

内部から軸部材の表面をみると明治以前の加工形状をしており、19世紀の中ごろは降らない建築物とみられる。



III 長屋門

寄棟造、茅葺の門で、扉口のほか三室からなる。建築年代は定かでない。主屋に引き続いて建てられたと考えられ、明治初期に大きな改造が行われている。



案内図

■ 見学される方へ

この建物は現在でも住宅として使用していますので、次のことに注意して下さい。

- 見学したい場合は、所有者等にお声をかけて下さい。
- 庭木・建物等に手を触れずに見学して下さい。
- 所有者が見学を認めた時以外は、建物内には入れませんのでご注意願います。

勤皇の歌人「佐久良東雄」生誕の地 佐久良東雄旧宅

茨城県石岡市浦須 314-1

■ 問い合わせ 石岡市教育委員会 文化振興課 電話 0299(43)1111
版 編 電話 0299(43)0480

国指定史跡

さくら

あずまお

佐久良 東雄 旧宅

幕末の日本で
国を愛し 国学を極めた
勤王歌人の生家



■ 佐久良東雄の生涯

旅のはじまり

佐久良東雄は、文化8(1811)年、牛久郎の新治郡浦須村(現石岡市大字浦須)で飯島平蔵の次男として生まれた。幼名を吉吉衛といひ、通称は叔直、字を低下(きげ)と書(きょうえん)と号した(以下、文中の呼称は「東雄」に統一する)。文政2(1819)年、東雄8歳の時、家督を姉キヨに譲り、信心深い両親の勧めもあって隣村である下林村(現石岡市大字下林)観音寺の呼称(康哉)に弟子入りし、文政8年に名を良哉と改めた。天保元年豊山派長谷寺に入り仏道を修行し、康哉没後の天保6(1835)年に観音寺を継いで第28世呼称と称した。



歌人東雄への道

下林村観音寺の康哉に弟子入りした東雄は、文政8年に名を良哉と改めた。観音寺の住職であった康哉は、国学を学んだ字で、文政8(1825)年に真鏡村(現土浦市真鏡)善応寺の住職となった後、天保3(1832)年に43歳で没した。皇道の復興に志を持つ一方、和歌に通じ万葉法師とまで言われた師・康哉への東雄の思いは深く、その墓所には「熱門康哉墓」「遺弟良哉総門下」との自筆の文字を残している。また、土浦時代の東雄は、藩士の大久保要や藤森弘庵や色川、河田幸枝、入江源順など有力な町人たちと親交を深め、和歌を詠みあった多くの作品も残されている。

国学への道 一尊王派との交流一

東雄は、天保6年7月に善応寺17代住職となった。このことにより、東雄は土浦城下の豪商で薬種商、醤油造業を営んでいた色川三申の知己を得ることになったが、東雄と9歳年長の色川は義兄弟のような関係となった。また、東雄は天保4(1833)年に小田村(現つば市)の農政学者・長島尉信と義兄弟の契りをつ結んでいる。長島は長く水戸藩に仕出し、会沢正志斎、藤田東湖などとの交流もあり、水戸藩の思想を深く理解していた。

そのような影響もあってか、国学者としての東雄は、水戸藩をはじめ全国の尊攘派志士との交流も深まり、特に藤田東湖の門弟・權任蔵などはしばしば善応寺を訪れ、寝食を共にしたという。藤田からは水戸藩への出仕も勧められたが、「我既に主あり、心あるべからず」とこれに応じなかった。



善応寺観音堂にかけられてある「室観音」の扁額

王政復古への道

天保12(1841)年、東雄は鹿島神宮へ参拝し王政復古を祈願し、色川らと鹿島神宮に桜の苗木1,000本を寄進した。この頃から選俗の意

志を固めていた東雄は、天保14(1843)年に選俗、鹿島神宮で深斎し、名を佐久良叔直と改めた。なお、「東雄」の名は善応寺時代から変わりがなく、静馬、健男とも名乗ったと伝えられている。

選俗後の東雄は、水戸藩医師・鈴木玄兆の孫で鈴木宗との妹・輝子と結婚して江戸へ出たが、生活は苦しく、たびたび色川の援助を受けている。そのような中でも東雄の尊皇攘夷への志は深まり、それは多くの詩となって発表された。

弘化2(1845)年、上京を決めた東雄は「大王の御京に登る、君が御京に、歩めば歩む毎にみさとに近く」なる歌びの語を作る。東雄は、一旦伊勢の白子御園村に落ち着いて妻子を呼び、間もなく和泉の池上(現大阪府)へ移って江戸で東雄に師事していた南繁信の世話を受けた。その後、東雄は大坂坐摩神社(市内北・社領2,800石)の祝部として身を寄せて国学指南や国学諸本の出版に携わり、平田篤胤(「出定笑語」)、本居宣長(「秘本玉くしげ」)、黒沢翁流(「雅言用文章」「言葉のしるべ」)「難波羅人歌合」などを出版。このうち「言葉のしるべ」には自ら序文も書いていた。そのような中で、朝廷と東雄を結びつけたのは田中河内介であった。田中は幕末の儒学者、漢学者で、大納言中山忠能の子息の教育係を務める一方、尊皇攘夷派の志士としても活動していた。中山家は、忠能の息女慶子が孝明天皇皇子睦仁親王(のちの明治天皇)の生母で、皇子降臨の祈願を坐摩宮に託された。祝部である東雄もこれにかかわっていた。嘉永5(1852)年、時の神祇伯・白川資訓からは神祇道学師の称号を授けられ、声望の高まりから、国学・歌道を指導していた私塾・惟神舎の門人も多数にのぼったといわれる。また、嘉永7(1854)年頃、東雄は活躍の場を京に移し、妙法院宮家の中興席格となつたという(一説では妙法院の御寶付金支配人、寶付所代を命じられたともいう)。

旅の終わり

万延元年(1860)年、水戸藩浪士らが老・井伊直弼を桜田門外に襲撃し、殺害した「桜田門外の変」が起きたが、東雄は、襲撃成功後に上方での学兵を企図していた事件の領袖の一人高橋多一郎を匿していた。高橋はその後、大坂四天王寺境内で追手に囲まれて自刃したが、その同じ日、東雄は高橋を匿っていた替で大坂奉行所に捕えられ、江戸へと送られた。伝えられるところでは、江戸へ送られる途次、東雄は旅籠の主人や出入りの者を集めて「古事記」の講釈をして国体觀念の醸成に努めることを忘れなかったという。また、東雄は万延元年に江戸佐馬町の半で病没したが、この際、「徳川の業は食まず」として絶食し、餓死したと伝えられている。行年50歳であった。

東雄の遺体は、いったん江戸小塚原回向院(現東京都荒川区)に葬られ、明治2(1869)年に大阪府天王寺村(現大阪市天王寺区)へ、さらに昭和7(1932)年に土浦市真鏡町の善応寺へ改葬されている。また、明治24(1891)年に靖国神社に合祀され、明治31(1898)年には従四位が追贈された。

※参考・引用「八咫町史(平成17年3月25日 八咫町史編さん委員会)」、「佐久良東雄(昭和57年3月25日 八咫町教育委員会)」、「佐久良東雄伝(明治27年3月26日 佐久良蔵)ほか



東雄神社境内の従四位記念碑

■ 歌人としての東雄

東雄の歌はかねてから高く評価されていたが、特に昭和初期から戦中にかけては、異質運動に利用された面があったとも言え、天皇に対する東雄の至誠は広く国民に親しまれた。

東雄は、在世中の天保11(1840)年に自ら歌集「はるのうた」を刊行しているが、その歌集は昭和に入って幾度も歌集という形にまとめられ、現在もなお歌集が刊行されている。歌人で国学者の佐佐木信綱は、昭和18年刊行の「佐久良東雄歌集(昭和18年9月18日 佐久良東雄大久保要顕彰会編 櫻樓社)」に寄せた序文で「万葉風の歌を善くし、意調ともに雄勁な作を多く伝えている」、「東雄の歌は、風月の遊びではなかった。熱血に燃ゆる胸中の思がおのづから発露したものである」とし、「当時の志士に勝かめ歌人の中にも三人を挙げれば必ず数へられるすぐれた一人」と評している。

代表歌 「佐久良東雄歌集」(前出)より

- ・天皇につかへまつれとわれを生みし吾がたらねぞたふとかりける
- ・朝日豊稔のぼるひのものやまとの国の春のあけぼの
- ・君がため朝馳もふみてゆく道はたふとくうれしく悲しくありけり

故郷に関係する歌

「水戸行歌日記」より(天保11年6月16日～19日)

- ・市川といふ里と府中の間に高くかけた橋のうへにたちてふるさとのかたゆながるゝ恋瀬川にしからずたれかすくべき



国道六号にかかる恋瀬橋から東雄ふるさとを思い眺めたと思われる恋瀬川と筑波山の風景

- ・府中を過ぎて松並木をゆけば

さらでだにものおもひつゝゆくみちを悲しきそふるひぐらしのごさちゝはゝはいかみすらすむのみちを吾が子ゆくともしらであるらむ
天保12年春 鹿島からの帰途高浜の篠目原佐を訪ねた際の歌か
つづ 12月 25日
・沖津波千重に來寄する高浜の波末風風者涼しくありけり